

## (2) 学びから始めるキャリア教育 ～プロジェクト・ベース学習(PBL)の適用～

上杉賢士

(千葉大学大学院教育学研究科 教授)

本日、それぞれの先生方の発表をうかがいながら、「キャリア教育とは、いろいろだな」という思いを新たにしました。現在、キャリア教育という名前のもとにさまざまな実践が行われています。それらを整理して、道筋をつけてみたいというのが前半部の話です。そして、ある意味で回答の1つとしてプロジェクト・ベース学習(PBL) この方法について具体的な実践例を交えて紹介したいと思います。

### 1. キャリア教育の多義性

キャリア教育という言葉は、さまざまな意味で使われています。その整理のための助走として、私なりの問いを発してみたいと思います。

1つ目、「キャリア教育」という言い方をしますが、例えば、ある平面に教育の全体像があって、その中のある部分を区切り取ってキャリア教育と称するはずだとしたら、そのキャリア教育を除いた場合、残りは一体何と呼べばいいのでしょうか?。一般的には、そこは学力向上とか、さまざまな課題が提示されています。では、一体それはキャリア形成に役立たないのかといえ、決してそうではない。かなり大まかな整理をすると、「キャリア教育=教育」という考え方も、ある意味で成り立つのではないかというふうに考えています。これが1つ目です。

2つ目です。ある県に行って、少々乱暴だったんですけども、カンフル剤のつ

もりで質問をしました。「もし、文部科学省がキャリア教育をやらなくていいと言ったらやめますか?」。勢いよく3人ぐらい手を挙げた人がいました。つまり現場には、それほど切実感がない人がいるということです。「キャリア教育をやる、やりなさい」という指示があるからやっている、多分、それではいけないのだ

#### 「キャリア教育」の多義性と再定義

- 「キャリア教育」の残余カテゴリーは  
教育-キャリア教育=?
- 「キャリア」の意味をどうとらえるか  
職業、仕事、経歴、人生、生涯…
- あるシンポジウム体験から  
自尊感情、意志決定、セカンドキャリア、そして「人の一生」

自らの将来を見据え、社会的状況において、  
自己実現を図ろうとすることを支援する教育

ろうと思います。今、子どもたちが置かれている状況から考えて、キャリア教育をどのようにして今の教育の中に忍ばせていくかということは、極めて重要な課題だろうと思います。

3つ目です。産業構造の変化により若者の就労が若干停滞しています。フリーターや、いわゆるニートが急激に増えてきています。それでは、「これから経済状況が好転して採用が拡大し、フリーターが、あるいはニートがいなくなったら、キャリア教育をやめますか？」

いや、それでもやはりキャリア教育は必要です。では、その論拠をどのようにつくっていくかということが、今私たちに問われているのではないのでしょうか。このことを問題提起として冒頭に提案させていただきます。

このように考えると、改めて「キャリアって何だろうか」ということを、われわれはきちんととらえておく必要があると思います。英和辞典を引くと、職業、仕事、経歴、人生、生涯……、さまざまな意味があります。このどれに注目するかによって、キャリア教育、もしくはキャリア形成という言葉の意味が、それぞれに別々の理解で広がっていってしまいます。無論、それぞれにさまざまな解釈をもとに展開するというだけでもよいのですが、実は注目するワードによって、展開の仕方あるいは基本になる考え方というのが、かなりの違いを持ってくるということは少なくとも承知しておかねばならないと思います。

かつては「職業、仕事」ということに注目が集まっていました。しかし最近では、一般的に「人生」あるいは「生涯」という言葉に注目し、それがゆえにキャリア形成という表現が生まれてきたと、私は理解しています。

先般、NPO法人「キャリアキッズコンソーシアム」が、やはり同じようにキャリア教育のシンポジウムを開催しました。そこに、ゼッターランド・ヨーコさん、



元サッカー日本代表・相馬直樹さん、2人がシンポジストとして上がりました。このお2人の話を伺って、私は強いインパクトを受けました。

例えばゼッターランド・ヨーコさんは、ご存じのように、最終的にはアメリカのナショナルチームのセッターとして活躍されたわけですが、彼女は小学校に入ったときから既に体が大きかった。まともに日本語が

話せない。格好のいじめの標的となりました。学校に行くのが、嫌で嫌で仕方がない。そのときに先生が、「ヨーコさん、あなたにもいいところがたくさんあるんだよ」と励ましてくれたが、これが自分のエンジンになった、という話をされました。彼女は、自尊感情、つまり自分の生涯を生きていくためのエンジンになる、極めて重要な自尊感情をそのときに得たのだという述懐をされていました。

相馬直樹さんは、清水の出身で、高校卒業時点で既にJリーグに誘いを受けました。しかし彼は迷いに迷った結果、大学に進学して、それからでも遅くないということでJリーグに入ったということです。彼は、高校からプロに入るか、大学に行ってからプロに入るかということを含めて、自分の人生の節目節目は、自分の意思で決定してきたという話をされました。

自尊感情をエンジンにして意思決定を丹念に重ねていく、このプロセスによって自分のキャリアを形成していくという、私なりにこんなふうにストーリーを描いたわけです。

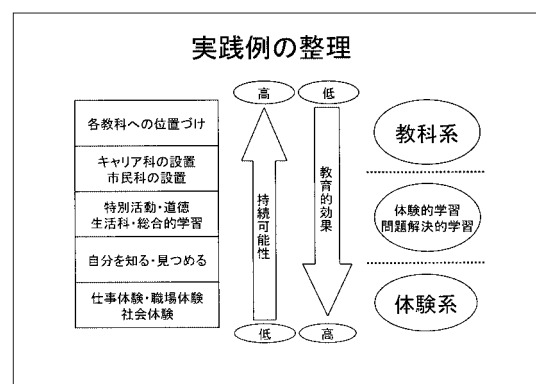
この2人が共通してその後の話の中で紹介されたのは、セカンドキャリアということでした。スポーツ選手の輝く時期は非常に短いものです。現役を引退した後の人生のほうがはるかに長いわけです。その後の自分の人生をどのように開いていくかということも、極めて重要なことです。そこまで視野に入れて、自分の人生設計をどのようにしていくかということ。2人から極めて重要な課題を提示されたと思います。

東北楽天イーグルスの田中将大投手は11勝をあげて、新人王を獲得しました。早稲田実業のハンカチ王子こと斎藤佑樹投手は進学しました。この2人がこの後、どのようにキャリアを形成していくのか、われわれはある意味で注目したい。そんなことも考えるわけです。

最後にそのシンポジウムで、私はゼッターランド・ヨーコさんに質問しました。「キャリアという言葉は、さまざまな日本語に訳されますが、あなただったらどういう言葉に訳しますか？」と。しばらく「うーん」と詰まって、絞り出した一言が、「人の一生」ということでありました。つまりキャリアというのは、人の生涯を見通して、あるいは自分の生涯を見通して、それを計画的に組んでいくこと。そのエンジンになるのは自尊感情であり、あるいはそれぞれの局面で自分の意思で物事を決定していくということ。それらを提供していくということが、恐らくキャリア教育の極めてベースの部分で重要視されているのではないかと、そんなことを考えた次第です。

そうしたことを勘案して、キャリア教育を私なりに定義すると、「自らの将来を

見据え、社会的状況において、自己実現を図ろうとすることを支援する教育である」と定義することができるかと思えます。



私のところに1年間サバティカルを取って、現場の先生が来ています。キャリア教育の研究をやるといふことで、いろいろな形で情報を収集し、それらを分類、整理しました。私もその作業に参加しましたが、現在、さまざまなレベルの、さまざまな視点からのキャリア教育が展開されています。

●各教科への位置づけ

例えば社会科あるいは家庭科で、キャリア教育をどうしていくかということ。大きく枠組みは壊さないで、それぞれが持っている固有の内容をキャリア教育と関係づけて、教科の中にキャリア教育の視点をまぶしていくという実践があります。

●キャリア科の設置、市民科の設置

キャリア教育をより効率的に推進するために、新たな教科を設置する。これは、ご存じのように教育特区の認定などを受けながら、学習指導要領の枠を若干外れて新たな方向を示している自治体が幾つかありますが、その例を指しています。

●特別活動・道徳・生活科・総合的学習

関先生のご報告の実践も、恐らく総合的学習を活用されたのだらうと思えます。この種の実践があります。

●自分を知る・見つめる

スペシャルプログラムを開発して、それによって自分の生き方を見つめてみる、あるいは自分を見つめてみるという実践のカテゴリーがあります。

●仕事体験・職場体験・社会体験

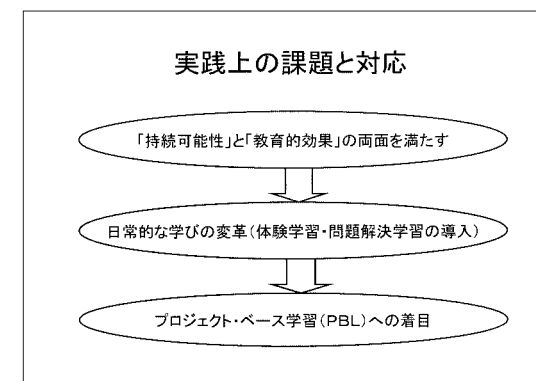
これらを含めて、いってみればトピック的に行うものがあります。実は、このように並べたのは意図があります。改めて整理してみると、恐らくキャリア教育の極めて重要な観点の1つとして持続可能性(サステナビリティ)長く続くということがあります。この点から考えたとき、既存のカリキュラム、既存の教科枠の中に、キャリア教育の意味を含めていく、長く続けるという意味で言えば、こ

れが一番都合がよいと思うのです。

例えば、何か企業と連携して、あるいは職場体験という形で受け入れ先を探して、そこで学習体験をするということは、残念ながら受け入れ先の事情によって閉じてしまうという不安定さがあります。そう考えると、下から上にいくにしたがって持続可能性が高くなっています。職業体験を含め、さまざまな試みが行われています。では、それらは不安定なだけの実践であるかという、決してそうではありません。教育的な効果は極めて高いとは言えます。この持続可能性と教育的効果、この両方をほどよく満たすプログラムの開発が、今、求められているのではないかと考えました。

3つに整理すると、特徴として持続可能性は高いけれども教育的効果はもうひとつというところを、「教科系」として位置づけます。下が「体験系、イベント系」と整理してよいと思えます。教育的な効果は非常に高いけれども、安定的にそれを続けるという保証は残念ながら今のところあまり形成されていないということです。そうすると、中間の「体験的学習」「問題解決的学習」を日常の学びの中に導入していくということが、有効な方法として考えられるのではないか。これが実は、私が注目しているプロジェクト・ベース学習(略称PBL)にいざなうための論法です。

実践上の課題を整理すると、『持続可能性』と『教育的効果』の両面を満たすように、そしてそのために「日常的な学びの変革」をしていくのであるということです。現在のような、座学を中心とした、教師が正解を持って、それを子どもたちが探すというような学びではなくて、体験を通して学ぶ、問題解決的に学ぶというような学びがもっと日常的に子どもたちの環境に用意されてよいと思えます。その結論が、「プロジェクト・ベース学習への着目」ということです。



2. プロジェクト・ベース学習(PBL)とは

それでは、プロジェクト・ベース学習とは一体何かということで、ざっと整理いたします。ご存じの方が多いかと思えますが、通称プロジェクト学習(あるいは

## Project-Based Learningとは何か

- キルパトリックの「プロジェクト・メソッド」に起源をもつ
- 「目的・計画・実行・判断」の4つのフェーズによって定式化された教育法として定着した。
- その後、課題やニーズの多様化により、定式にとられない「課題解決型学習」のモデルとして定着した。
- それらは「プロジェクト学習」と総称されるが、プロジェクトを基本にしたという意味で「プロジェクト・ベース学習」と呼ばれることもあり、明確な区別はされていない。
- ミネソタ・ニューカントリースクール(MNCS)では、脳科学研究や認知心理学の知見などにもとづき、現代にふさわしい学びの方法として開発した。

## MNCS型PBLから エドビジョン・モデルによるPBLへ

- MNCS型PBLの成功は、ゲイツ財団の支援も得て一躍注目された。(The Coolest School in America!)
- 全米初の教員協同組合として設立されたエドビジョン(EdVisions)がMNCS型PBLの積極的なプロモートを展開し、現在MNCS型PBLをモデルにした学校が28校設立されている。(うち10校を訪問した)
- 地域的環境や学習者のニーズに応じたアレンジがなされ、独自の展開を見せている。その意味で、エドビジョン型PBLと呼ぶのがふさわしい。

得て、一躍注目されました。その実践を見に来たゲイツ財団の担当者が、The Coolest School in America! (アメリカで最も格好いい学校)と思わず叫んだということで、同名の本が出ています。

今年訪問したところでは、ゲイツ財団からの援助をほぼ使い終わって、これからは自力で歩いていくということのようでした。エドビジョンが、ミネソタ・ニューカントリースクール型のPBLの積極的なプロモートをし、現在28校が設立されています。ほぼカリキュラムの半分を超えてPBLの方法で子どもたちは学んでいます。28校のうちの10校を既に訪問いたしました。それぞれに地域的な実



情によってさまざまにアレンジしておりますけれども、それらを総称してエドビジョン型PBLと呼びながら、以下その最大公約数的共通項を紹介したいと思います。

全米初の教員協同組合として設立されたエドビジョンは、ミネソタ・ニューカントリースクールで開発したプロジェクト・ベース学習普及の支援組織として、さまざまな活動を展開しています。プロジェクト・ベース学習は、ゲイツ財団の支援も

得て、一躍注目されました。その実践を見に来たゲイツ財団の担当者が、The Coolest School in America! (アメリカで最も格好いい学校)と思わず叫んだということで、同名の本が出ています。

今年訪問したところでは、ゲイツ財団からの援助をほぼ使い終わって、これからは自力で歩いていくということのようでした。エドビジョンが、ミネソタ・ニューカントリースクール型のPBLの積極的なプロモートをし、現在28校が設立されています。ほぼカリキュラムの半分を超えてPBLの方法で子どもたちは学んでいます。28校のうちの10校を既に訪問いたしました。それぞれに地域的な実

情によってさまざまにアレンジしておりますけれども、それらを総称してエドビジョン型PBLと呼びながら、以下その最大公約数的共通項を紹介したいと思います。

全米初の教員協同組合として設立されたエドビジョンは、ミネソタ・ニューカントリースクールで開発したプロジェクト・ベース学習普及の支援組織として、さまざまな活動を展開しています。プロジェクト・ベース学習は、ゲイツ財団の支援も得て、一躍注目されました。その実践を見に来たゲイツ財団の担当者が、The Coolest School in America! (アメリカで最も格好いい学校)と思わず叫んだということで、同名の本が出ています。



PBLの特徴を4つに整理しました。

- 民主的な風土を形成し、有能な社会人の育成を目的として、自律学習者としての成長を促す教育方法である。
- 自らの興味や関心、問題意識に基づく追究を、企画立案からプレゼンテーションまでの一連のプロセスにおいて主体的に展開する。

先ほど関先生のDVDでご紹介いただいた映像の中で、学生さんが思わず「プロジェクト」と言っていました。おそらく大阪教育大学の学生さん、先生方、柏原小学校、それを挙げた一大プロジェクトという言い方ができるかと思います。このPBLでは、基本的に個人、もしくはグループで、子どもたちは自分たちで企画を立て、それに沿って追究するという道筋をたどっていきます。

- 学習者にはあらかじめ評価規準が示され、それらを満たすように学習をコント

## エドビジョン型PBLの特徴①

- 民主的な風土を形成し、有能な社会人の育成を目的として、自律学習者としての成長を促す教育方法
- 自らの興味や関心、問題意識に基づく追究を、企画立案からプレゼンテーションまでの一連のプロセスにおいて主体的に展開する。
- 学習者にはあらかじめ評価規準が示され、それらを満たすように学習をコントロールする。
- 教師は教育に対する決定権(オーナーシップ)をもつとともに、生徒に対しては「傍らに寄り添う存在」としてのアドバイザーであり、学習へのアドバイス、情報提供、学習参加などの「同行者」として教育責任を果たす

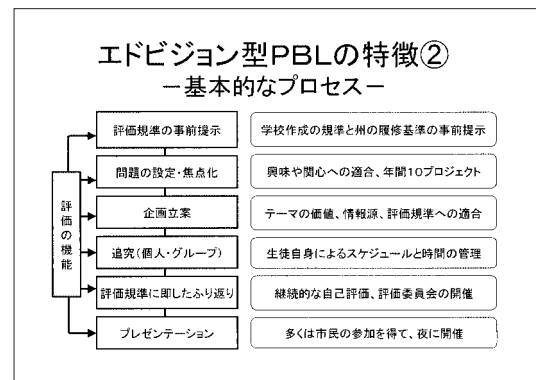
ロールする。

評価規準は2つあります。1つは州の履修基準。言い換えれば、日本でいう学習指導要領です。学習指導要領が子どもにあらかじめ渡されているのは、日本では考えにくいのですが、例えばミネソタでは大綱化されていますから、子どもたちには「この中学、あるいはこの高校を卒業するまでにこれだけのことをクリアするのだよ」というふうにして評価規準の1つとして渡されるのです。

もう1つは、学校が作成した自律学習者のための評価規準。先ほど立田先生がコンピテンシーという言葉で表現されていましたが、どうやらそれに相当するものです。子どもたちは2つの評価規準を渡されて、卒業までに1つ1つプロジェクトを行いながら、このプロジェクトはどの規準に該当するかということをチェックして、卒業までにすべての評価規準をクリアするように自分の学びをコントロールしていきます。

●教師は教育に対する決定権（オーナーシップ）を持つとともに、生徒に対しては「傍らに寄り添う存在」としてのアドバイザーであり、学習へのアドバイス、情報提供、学習参加などの「同行者」として教育責任を果たす。

このうちの、特にオーナーシップという言葉の翻訳が非常に難しいものです。日本の教育にはまだ概念として定着していません。私は「自律的实践者」、つまり教育にかかわる多くの部分を、自らと、あるいは関係する人たちとの判断で1つ1つ決めていくということだと思っています。残念ながら、日本には学習指導要領があり、それに基づいてという環境の中で、現在、日本の先生たちが自分の意思で決定する部分は必ずしも多くありません。しかしそれは、もしかしたら試みていないだけであって、その気でやればきっと多くの部分は先生たちの判断でやっていけるのではないかと考えています。とりわけ学習環境の整備においては、先生方の判断に任される部分は間違いなく多いのだと考えています。



ここにエドビジョン型PBL、企画書のフォーマットがあります。学校によって若干の違いはありますが、おおよそこのような手順で進みます。

評価規準の事前提示は、学校作成の規準と、州の履修基準の両方があらかじめ提示されます。

「問題の設定・焦点化」とは、どんなテーマを取り上げるかを定めることです。そして、そのテーマを追究するためにどのように企画を立てるか。その立てた企画に基づいて、個人、もしくはグループ、さまざまなバリエーションがありますが、それを「追究」していく。そして「評価規準に即したふり返り」、最後に「プレゼンテーション」をします。ここで重要なことは、評価の機能がすべてのステップにおいて生きているということです。

1つだけ紹介すると、「企画立案」のところに情報源とあります。これは、「このプロジェクトを遂行するにあたって、最低3つの情報源を活用しなさい」ということです。そして、その1つは必ず実在の人物であることという条件が提示されます。実在の人物を情報源にすることで、子どもたちは自然に地域に出て、専門家に会いに行きます。そして、インタビューや調査を行うのです。このような形で、オリジナルな情報をもとに追究していくということになります。

ここに実践例を3つ紹介します。1つはアバロン・スクールです。アメリカ・ミネアポリスにあるアバロンという学校で、学びの結果、生徒が言っていた言葉です。もう1つ、京北学園白山高校では、既にPBLの実践を行って5年目に入ります。生徒たちはさまざまな感想を残しています。また、千葉県旭市では、昨年、中学生による政策提言が行われました。市町村が合併して新しい市（旭市）になり、そこに5つの中学校があるのですが、生徒たちは、中学生同士のつながりがないので合同の文化祭をやりたいと言ったので

### 実践例のいくつか

- アバロン・スクール(PBL校)のアイコ  
アバロンに来たら、一番、自分で何をしたいのか、どうやらそういう資料が得られるのかということをもっと計算してやっていないかと思いません。社会に出て自分で行動を起こすような力をもてたと思います。
- 京北学園白山高校のプロジェクト  
最初は面倒だと思いました。でも、最終的に発表しなくてはならないので、自分だけが分かればいいのではなく、他の人に理解してもらう能力も必要です。幸い3年なんですけど、人前で発表する時にも生かされていると思います。
- 千葉県旭市における中学生による政策提言  
合併後の新・旭市の総合計画に、中学生による提言を反映させる試み。「皆さんが成人式を迎える時(7年後)に、皆さんの提言がどのくらい実現されたか評価していただきますよ！」(伊藤忠良市長)。



す。市長さんに直訴したところ、「それはあなた方でできるでしょう」と、ぼんと投げ返されて、実は現在、企画が着々と進んでいるということです。

キャリア教育の視点からの効果については、時間の関係もありますので、資料をご覧ください。

このプロジェクト・ベース学習を日常的な学びの中に定着させることによって、子どもたちは将来に向けて希望や意欲の域を越えて、実力と自信を獲得していくということを実践を通して確信してきました。これから実践の場をさらに探しているところです。簡単なまとめをします。キャリア教育に必要な条件の1つとしての持続可能性を保証するためには、日常的な学びをキャリア形成に貢献できるようにしていくことです。たとえば、問題解決型あるいは参加体験型の学習を大幅に組み込むことによって、特別な装置は必ずしも必要ではないと考えられます。職業訓練という特化された学習ではなく、日常の学びの変革によって成し遂げられるキャリア形成に注目しよう！ とまとめて、私の発表を閉じさせていただきます。

#### キャリア教育の視点からの効果

- 逆算プランニングによるカリキュラム構成
  - 目標としての民主的市民・有能な社会人の育成
- さまざまなテーマへのチャレンジ
  - 学びを通じた個性・適性の発見と伸長
- 評価規準の事前提示
  - 規準に適合するように学びをセルフコントロール
- 社会的文脈・広がりの中で学ぶ
  - 多様なコミュニケーション能力・世界観の獲得
- 将来を見据えて学ぶ
  - 希望や意欲の域を越えて、実力と自信の獲得

#### Information

- 参考文献
  - ・ロン・ニューエル著／上杉賢士・市川洋子監訳『学びの情熱を呼び覚ますプロジェクト・ベース学習』(学事出版、2004)
  - ・上杉賢士・市川洋子著『プロジェクト・ベース学習で育つ子どもたち～日米18人の学びの履歴』(学事出版、2005)
  - ・科学研究費報告書「総合的な学習の進化型としてのプロジェクト・ベース学習の導入・実践化に関する報告書」(研究代表者:上杉賢士、2007)
- NPO法人「日本PBL研究所」の設立
  - ・日本PBL研究所では、PBL校の視察を行っています。
  - ・2008年8月に、「エドビジョンセミナー in JAPAN 2008」を開催する予定で準備を進めています。